

教育課程論第 9回 (11月24日) リアクション

テーマ 教育とジェンダー (テキスト9章)

グループ メンバー (番号 <下桁>、名前)

() ()
() ()

グループで、話しあった内容を、下記に書きなさい。

- 1 通った高校で、女の先生は、どのくらい(何割)、いましたか。(テキスト9章参照)
- 2 通った高校で、校長先生は、男性でしたか、女性でしたか。(同上)
1 男性 名 2 女性 名
- 3 男女でカリキュラム(教育内容、教科)が違うということがありましたか。(同上&、谷田川参照)
- 4 先生の児童・生徒に対する扱いが、男の子と女の子で違うということがありましたか。(小中高で) あった場合、それはどのようなことですか。(同上)
1 なかった。
2 あった→その内容()
- 5 役員を決めるとき、男子が委員長、女子が副委員長というように、女子が男子のサポート役に回ることはありましたか。(同上)
1 あった () 2 なかった
- 6 学校の成績では、一般に男子と女子で、どちらがよいということがありましたか。(同上)
1 男子が高い 2 違いはない 3 女子が高い 4 教科により違う
- 7 男性の方が女子より自殺率が高くなっていますが、「男性が生きづらい」のはなぜでしょうか。(多賀太「男子をめぐる問題」参照)
- 8 生物学的な性別(セックス)と社会心理的な性別(ジェンダー)のどちらが大切ですか(上野千鶴子「差異の政治学」参照)
- 9 将来、どのような生活をしたいですか
1 男は外で働き、女は家事育児中心の生活
2 男女は平等に働くが、出産・育児期間は女性が主にそれに専念する
3 男女で平等に働き、家事・育児も平等に行う
4 その他()

差異の政治学

上野千鶴子

一 セックスとジェンダーのずれ

セックスとジェンダーのずれを問題化したのは、ジョン・マネーとペトリシア・タッカーの『性の器名』(Money & Tucker, 1976)であった。ジョーンズ・ホプキンス大学の性診療の外來をうけていたふたりは、半陰陽や性転換希望者などの患者を相手にして、ジェンダーがセックスから独立していることをつきとめた。生物学的に性別を決定する要素には、遺伝子、内分泌、外生殖器などの異なる次元がある。だが自然界にある性別には、どのレベルでも連続性があり、男/女のような二項対立にはできない。遺伝子ではX染色体とY染色体の組み合わせが性別を決定すると言われているが、現実にはXXY(超女性)やXYY(超男性)のような組み合わせも存在する。XXYの遺伝子をもった女性はたまたま「超女性」と名づけられているが、だからといって彼女がとくべつに「女らしい」外見やふるまいを持っているわけではない。X染色体とY染色体との二項的な組み合わせからなる遺伝子上の性差でさえ、二種類以上の組み合わせによる連続性を構成している。

内分泌の次元でみると、自然的性差の連続性もつとほつきりする。胎発生時の胎児はすべて女性の身体的機能をもっているが(マネーとタッカーはこれを「イヴ原則」といふ)、発生の途中で特定のホルモンのシヤワーをあびて、男性機能が分化していくと言われている。発生の初期にみれば、男性は「第二の性」なのである。このホルモンのシヤワーには発生の過程における臨界期があって、それを過ぎるとあとではどんなホルモンを注入しても胎児の性別は変化しない。「女性ホルモン」「男性ホルモン」と便宜上呼ばれているこのふたつのホルモンは、その後も第二次性徴や更年期などにはたたり、性機能も変化させる。内分泌学的にいえば、男性と女性のちがいは、ただこのホルモンのバランスのちがいにすぎず、それも一生をつうじて、また性周期をつうじて、変化する。ホルモンの連続性からいえば、世の中には「より男性的」もしくは「より女性的」なホルモン分布をもった個体、または状態があるにすぎない。

外生殖器についても同じことが言える。出生時の性別の判定は、とりあげた医師や助産婦によって外生殖器の形状から判断されるが、これには間違いがしばしば発生する。発生の途中で、なんらかの事情で男児の外生殖器が矮小化したり、女児の外生殖器が肥大したりすることがある。まれには半陰陽といって男女の外生殖器をもとにそなえて生まれてくる場合もある。性別判定の誤認があまりかくなるのは、ふつう第二次性徴期を迎えた時である。女の子だと思っていたのに声変わりがしたり、ヒゲがはえてきたり、いつまでたっても初潮がなかったりすることで、生物学的性別の誤認が発見されることがある。

すなわち、遺伝子、内分泌、外生殖器のどれをとっても、自然界には性差の連続性があるのに対し、文化的な性差は中間項の存在をゆるさず、男でなければ女、女でなければ男、と排他的な二項対立のいずれかに、人間を分類するのである。

マネーとタッカーは、性診療の外來で、性転換希望者の相談と指導にあたっていた。性転換希望者には男もしくは女として育てられて、第二次性徴期に性別の判定のまちがいに気づいたケースが多い。カウンセラは当初、患者の生物学的な性別に心理的な性別を合わせようとする。そのほうが「自然」だからである。それだけではない。性転換には、苦痛の多い身体改造がともない、時間もお金もかかる。かれらは現実を憂えるかわりに、「気持ちの持ちよう」を変えよう、患者にすすめたのである。だがかれらが発見したのは、患者の「性自認(ジェンダー・アイデンティティ)」はその年齢までに強固に形成されており、それを憂えるのは容易でないこと、もしその「指導」を強制すれば、患者はアイデンティティの危機から自殺にさえ追いこまれかねないことであった。多くの患者は、豊胸術、ペニス切除、造陰術のような苦痛の多い手術をほどこしてまで、自分の「性自認」に生物学的な身体のを合わせることを選んだ。つまり、セックスにジェンダーを合わせるより、ジェンダーにセックスを合わせるほうが、また抵抗が少なかったのである。

「性自認」は二歳までの言語獲得期に形成される。ホルモンと同じく、この臨界期を過ぎるとその後は変化しない。心理学的な性差研究にはおびただしい蓄積があり、幼児の時から、男児は空間能力にすぐれ、女児は言語能力にすぐれているといった調査結果があるが、マネーとタッカーによれば、被験者が調査に応じられるようになるまでには、「性自認」は形成されてしまっていることになる。したがって言語によっておこなわれるあらゆる心理学的性差研究は、一種の「予言の自己成就」、すなわち言語によって形成された性差を言語によって追認するという作業になる。

マネーとタッカーの業績は、セックスとジェンダーのずれを指摘したにとどまらない。もっと重要なことに、かれらの仕事は、セックスがジェンダーを決定するという生物学的還元説を否定した。万一外生殖器に異常があっても、もし遺伝子やホルモンが性差を決定するならば、患者たちは周囲の性別誤認にもかかわらず、自然に「男性的」もしくは「女性的」な心理的特徴を発達させていたはずである。マネーとタッカーは、生物学的性差の基礎のうえに、心理学的性差、社会的性差、文化的性差が積み上げられるという考え方を否定し、人間にとって性別とはセックスではなくジェンダーであることを、明瞭に示した。人間においては、遺伝子やホルモンが考える、のではない。言語が考える、のである。

マネーとタッカーの業績は、つぎの二点にまとめられることができる。第一に、生物学的還元説に対して、セックス(生物学的性差)とジェンダー(心理学的性差)とは端的に別なものだとあきらかにしたこと。第二に、だからといってジェンダーが自由に換えられるようなものでなく、その拘束力が大きいことを証明したことである。



男子をめぐる問題

1 「女子問題」への関心

▷1 「男子問題」に焦点を当てた初期の研究としては、多賀太、1996、「青年期の男性性形成に関する一考察——アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から」『教育社会学研究』58: pp. 47-64.

▷2 [V-2] 参照。

2 「男子問題」の発見

しかし、1990年代後半になると、まずは成人男性が直面する「男性問題」に社会的な関心が向けられるようになった。これらは、大きく分けてふたつの側面から捉えられた。ひとつは、男性が「女性問題」を引き起こしている側面である。例えば、ドムステイツク・バイオレンスやセクシュアル・ハラスメントのほとんどは、男性から女性への加害ケースである。従来「女性問題」として語られてきたこれらの問題は、男性が引き起こしているという意味では男性の問題でもある。もうひとつは、男性自身が「男らしさ」の社会的期待に苦しんでいる側面である。例えば、パワフル経済崩壊後の1990年代になると、男性の賃金の伸び悩みや失業・就職難が深刻化し、男性に一家の稼ぎ手役割を求める性別役割分業規範は、少なからぬ男性にとって圧力と感ぜられるようになった。こうして成人の男性問題が顕在化するなかで、教育における男子問題にも関心が向けられるようになった。例えば、従来から、教室で見られる「自己主張する男子と控えめな女子」という非対称な男女関係の形成には、教師による半ば無意図的な差別的処遇がかかわっていることが指摘されてきた。しかし、教室内での男子と女子の相互作用に着目した研究は、そうした男女の非対称な関係

の形成に、教室空間の支配権を握らうとして教師や女子に不満をぶつけたり攻撃したりする男子のパワーマンズも関与していることを明らかにした。また、社会や学校から向けられる「男らしさ」の期待に添えずに苦しんでいる男子、とりわけ授業においてもスポーツにおいても自信がもてず、周りに孤立している男子の存在が注目され、こうした男子をどう援助していくのかも模索されるようになってきた。

3 「男子の不利」言説をどう見るか

欧米では、1990年代半ば以降、男子の学業不振や学校不適応などを根拠として、「男子も問題を抱えている」というレベルにとどまらず、「男子のほうに不利である」という主張が声高に叫ばれるようになってきた。たしかに、国際学習到達度調査(PISA)の結果を見ても、ほとんどの参加国で、「読解力」に関する男子の平均得点は女子のそれを有意に下回っている。また、女子のほうが、大学進学タイムの中高等教育学校へ進学する割合が高いことや、学習活動への積極的な参加といった学校への適応度が高い傾向が欧米各国で報告されている。

こうしたなか、オーストラリアでは、従来の学校教育は男子の教育ニーズを十分に満たしていないとする連邦議会の報告書を受け、2003年から莫大な国家予算をつぎ込んで、男子への効果的なリテラシー教育や同性の指導者から援助を受けられる機会の提供などを含む、男子の補償教育プログラムの開始されている。しかし、この「男子の不利」という見方に対しては、批判的な研究者も多い。「男子の不利」という見方は、労働市場における女性の圧倒的に不利な状況や、男子からの暴力やセクシュアル・ハラスメントによって苦しんでいる女子の問題を見えなくさせてしまう。また、男子であれ女子であれ、教育達成を首尾良く渡し逃げている者もいれば、不利な生活環境のもとで学校生活への適応が困難になっている者もいる。そうしたなかで、男子と女子をそれぞれ十把一絡げにして、「不利なのは男子か女子か」「援助すべきは男子か女子か」といった二分法で問題を捉えること自体に限界がある。

日本では、現在のところ、人々の関心はむしろ若い男性の就職難に向けられており、欧米ほどに学齢期の「男子の不利」を主張する動きは見られない。しかし、女子に対する男子の学業不振をうかがわせる高校生のデータもあり、今後日本でも欧米と同じような主張が唱えられる可能性もある。われわれには、性別によって教育達成や職業達成のチャンスが大きく異なるという構造的側面を指摘しながらも、同時に、同校内の多様性や不平等なども目を向け、どのような子どもたちがどのような援助を必要としているのかを冷静に見極めていくことが求められている。

(多賀 太)

[V-3] 男子をめぐる問題

▷4 例えば、木村涼子、1997、「教室におけるジェンダーの形成」『教育社会学研究』61: pp. 39-54.

▷5 土田晴子、2008「男の子の多様性を考える」木村涼子・古久保さくら編『ジェンダーで考える教育の現在』解放出版社、pp. 62-77.

▷6 PISA OECD加盟国が参加して2000年から3年おきに実施されている15歳児を対象とした学習到達度調査。

▷7 鍋島祥郎、2003、「高校生のごとくジェンダー」解放出版社。

【参考文献】
Martino, W., Kehler, M. D. and Weaver-Hightower, M. B., eds., 2009, 'The Problem with Boys' Education: Beyond the Backlash, Routledge.

